天歩
2026年
11月
No.208



みかんの収穫風景。急峻な園地では立つのも一苦労です。温州みかんは12月までが収穫シーズン。収穫のタイミングを見極めながら行う一年の集大成です。

みかんの命をつないだ水

愛媛県南部の海岸沿いに広がる柑橘産地では、急な山の斜面を切り拓き、段々畑にしてみかんを作っています。広い平地も大きな川もなく、しばらく雨が降らなければたちまち地面も乾き、川の水も細くなります。1967年には3か月も雨らしい雨がない大旱魃に見舞われ、これを教訓として愛媛のみかん産地にダムの水を供給する南予用水が整備されました。

南予用水では集落ごとに拠点があり、そこから地域のみかん畑ひとつひとつに水を送っています。地中を配管が通り、畑のなかに立ち上げたスプリンクラーで水を届ける仕組みです。末端のスプリンクラー施設を管理しているのは地域の農家が運営する潅水組合。ここで維持管理や、潅水の判断と操作を行っています。

土壌センサーの活用

昨年からは、みかん畑に設置する土壌センサーの活用もはじめています。温度や日照量に加え、土のなかに埋めたセンサーで土壌に含まれる水分量をリアルタイムで計測できます。みかんのような露地栽培では人の力で温度や雨量は変えられませんが、土の乾き具合を数値で確かめることで水を与えるタイミングをより適切に判断できるのではないかと考え、この試みをはじめました。

最近は温暖化の影響なのか、雨が降るときはまとまって降り、降らないときはずっと降らないような気候になってきました。今年のみかんでは冬、春、夏とそれぞれの季節に乾燥する時期があり、スプリンクラー施設を回して潅水を実施していました。過去には冬や春の潅水はあまり行われていなかったのですが、土壌センサーで水分量を観察してきたこともあり、より敏感に潅水について考える一年になりました。

今年のみかん

昨年はどの品種も大豊作だったため、養分を使った樹が衰弱して不作になってしまう心配をしていました。そのため、樹が十分に回復するための土壌水分も大事になる年です。春を迎えてみると、伊予柑やポンカンなどの中晩柑ではやはり花の数は少なかったものの、温州みかんではしっかりと花が付き、今年も枝を垂らせて果実を成らせています。

夏は梅雨明けが早かったため長期間に渡って暑く乾いた気候になり、潅水設備がない園地では枯れてしまう樹も出るほどです。2カ月に渡って回り続けたスプリンクラーは果実の生育だけではなく樹の命も助け、水のありがたみを思い知る夏になりました。

たくさんの日光を受けながらみかんが育ったのち、秋になると一転して雨が多い天候になっています。今年は開花の時期が早かったこともあって、色づきや酸抜けといった成熟の進行は早め。いまのところは当地の例年比では糖度は高め、酸度は低めに仕上がってきています。

十一月から十二月にかけて、愛媛の温州みかんは最盛期を迎えます。出回る期間が長い温州みかんのなかでも、ちょうど中盤にあたるこの時期。果実が十分に成熟し、どの品種も内皮が薄く、味わいと食べやすさでもっとも温州みかんが楽しめる季節です。この難しい気候を乗り切ってきた生産者にとっても、一年の仕上げとなる収穫期。毎日忙しい日々がはじまります。



1 収穫前に行う糖酸分析の様子。

2 出荷施設で運用している光センサー。

1 みかん畑に設置した土壌センサー『e-kakashi』。

2 畑に穴を掘って土壌水分計を埋設しているところ。

3 この夏はスプリンクラーでの散水が続きました。

糖度計測のはなし

無茶々園ではみかんの糖度をいくつかの場面で計測しています。ひとつは生育途中や収穫前のサンプリングで、全部の果実は測れないものの、傾向を調べることはできます。もうひとつは全ての果実を測る出荷用の選別です。これは昨年整備した出荷施設にて、出荷前の選別の一部として行っています。

畑での生育経過を調べたり、収穫時の糖度を確認するには、手持ちサイズの糖度計を使います。『屈折式』と言って、果汁の濃さによって光の屈折率が変わる性質を利用し、果汁の状態で測る方法です。



一方、出荷施設には大型の選果機があり、選果ライン上を流れる果実を連続して計測できる非破壊式のセンサーを備えています。非破壊式では近赤外線を果実にあて、内部を通り抜けてきた光を調べる『透過式』と言われる仕組みで糖度を測っています。

透過式の場合、近赤外線の測定値だけで糖度がわかるわけではありません。事前に何十個もの果実を集めて透過式と屈折式の両方で計測し、近赤外線の測定値と果汁の糖度とを照らし合わせ、検量線というモデルを作っておきます。このモデルを使って、果実ひとつひとつの糖度を推定する仕組みです。

近赤外線の測定値は、果実の大きさや果皮の状態、温度などでも変わります。そのため、毎年出荷直前にはその年の果実を集めて品種ごとに検量線を作りなおしています。ただ選果機を通れば良いだけではなく、ちゃんとした下準備が必要なのです。

むちゃちゃの人。働く、暮らす

皆さま、初めまして。無茶々園スタッフの豊吉麻未です。おそらく、お客様から一番見えにくい所で仕事をしている私ですが、今回機会をいただいたので、私の仕事や働き方についてお話ししたいと思います。

無茶々園との出会い

私が無茶々園と出会ったのは、大学院を出て東京で就職したばかりの頃。新社会人として頑張る一方で、都会暮らしが肌に合わなかったのか「自然の中で仕事がしたい」と思うようになり、ウェブ検索で見つけた無茶々園のホームページを見たのがきっかけでした。

それまで無茶々園とは縁もゆかりもなく、みかんを通販で買おうと思ったことすらありませんでしたが、一人で転がり込んできた私を、会社や地域の方々は親切に受け入れてくれました。その後、無茶々園の農家と結婚して家庭を持ち、産休・育休の期間を除くと約8年半、ここで働いています。

仕事の内容

私が主に担当している仕事は、大きく分けて二つあります。

一つ目は、総務・経理の仕事です。チームで分担しながら、スタッフの勤怠管理や社会保険の手続き、お金の流れの管理など、会社を運営するために必要な仕事をしています。小さな会社だからこそ、会社の成長に合わせて仕事のやり方も変わっていきます。日々着実に業務をこなしながらも、新しいツールを導入したり、自分で工夫してみたりする面白さがあります。

生産者と消費者の橋渡し役

二つ目は、無茶々園ならではの仕事ともいえる、柑橘の生産情報の管理。いわば、みかんのトレーサビリティを支える仕事です。まず、生産者ごとに複数ある畑をすべて台帳に登録し、どの畑でどんな品種が栽培され、どのくらいの収穫が見込めるかを把握します。そして収穫前には、畑ごとに一年間どんな栽培をしたか（農薬や肥料の使用）について、生産者に記録を提出してもらいます。集まった生産情報をまとめて、営業や受付・出荷業務のスタッフにも共有し、会員の皆さまや、みかんを取り扱ってくださる生協・お店に必要な情報を提供しています。

皆さまと直接お話しする機会はあまりありませんが、日々の仕事が巡り巡って、ほかのスタッフを支え、生産者が丹精込めて育てたみかんをお届けする橋渡しになっていると感じています。



現在は子どもがまだ小さいため、時短勤務で働いています。子育て中は思いどおりにいかないことも多いですが、仕事の進め方を相談しながら、無理なく自分の役割を果たせるよう努めています。もちろん、周りのメンバーに助けてもらうこともあります。家族ぐるみで顔見知りの人も多く、困ったときに相談しやすいのも、この地域ならではのよさかもしれません。

まだまだ、仕事も暮らしも試行錯誤の毎日ですが、一息つきたい時には、デスクにみかん。これからも、周りの人たちへの感謝を忘れず、自分にできることを一つひとつ積み重ねていきたいです。

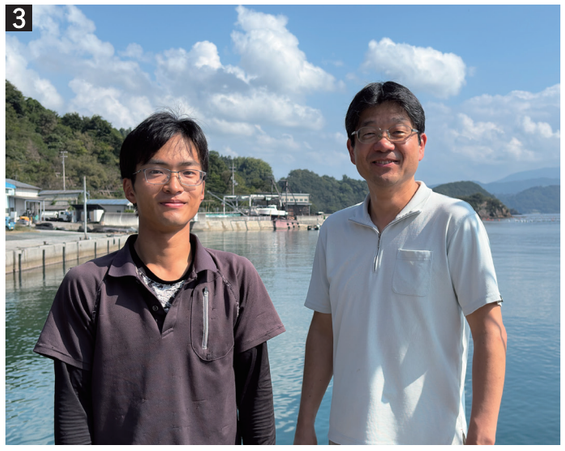
ともに働く仲間を募集中



無茶々園では現在、事務職スタッフを募集しています。働くことは、暮らすこと。仕事と暮らしは別々のものではなく、どちらも日々のいとなみの一部です。

一人ひとりが自分の仕事にやりがいを持ち、得意なことを生かして働く。足りないところは「お互いさま」の気持ちで補い合えばいい。決められた仕事をこなすだけでなく、自分たちで考え、工夫する。そんな働き方を、無茶々園では大切にしていきたいと考えています。これからの無茶々園を、一緒につくっていきませんか。







1 農作業終わりの夕焼けをバックに。
2 釣りあげた大きなハマチ（ブリ）。
3 右：筆者、細島毅
左：息子の陽介

日々是釣日和

明浜の海は穏やかで美しい。私たちにとって、この海はただ眺めるものではなく、暮らしのすぐそばにあり、その恵みを分けてもらう場所でもある。

千葉から移住した釣り好きの私だが、お金も時間も掛けず歩いてすぐに釣り場に行けるこの明浜は天国のようだ。移住当初は嬉々として釣りに出かけ夢中になって夜中の3時まで釣り続けたこともある。しかしあまりに簡単に釣れるので最近は釣りに行くというよりオカズを取りに行く感覚が強くなってきた。そんなテンションの私の横で、釣りに夢中になっているのが息子だ。5～6歳の時に釣りを教えたが、仕掛けを作って餌を付ければ釣れるからと後はほったらかしにしていた。

そんな息子が今は二四歳。70～80㎝のハマチ（一般的にはブリ）やカンパチ、タイ、ハタなどの大型の魚やアジやイカなどを釣ってくる。ほっといたら釣りの腕は完全に抜かれてしまった。

息子は3年前から、みかん農家になることを目指して中川真くん（伯父）の家で研修を続けている。みかん畑で土に触れ、暑い夏には汗を流しながら樹と向き合う。農業という仕事はすぐに答えが出るものではない。一本の樹を育て、花が咲き、実がなり、収穫を迎えるまでには長い時間がかかる。その時間を、少しずつ自分のものにしているところだ。

そんな息子は、みかん山でも海が気になって仕方がない「今何か跳ねたな」「ナブラが出ている」＊ナブラ：小魚が大型魚に追われて水面が波立つ現象

そんな時は仕事を終えて帰って来るなり家族に姿も見せず釣りに出て行く。そんな様子を見ると、農業とはまた違う自然との向き合い方を覚え、この明浜を堪能しているのだと思う。

近頃では明浜で釣れる魚にも変化を感じるようになった。かつて当たり前だった魚が少なくなった一方で、これまであまり見かけなかった魚が釣れることがある。海の魚が変わり、気候が変わり、農業のあり方も変わっていく。この田舎では時間流れはゆっくりではあるが、変化は確実に起こっている。息子がいつか自分のみかん畑を持ち、農家として歩み始めたとき、今日釣りをしているこの海や、山の様子はどうなっているのだろうか。釣った魚を捌き母親と楽しそうに会話をしている姿を見ながらぼんやりと考えている。そんな自分も年を取ったな感じながら、今晩は私も釣り竿を持ってオカズを取りにいこうかなと重い腰を上げる。

（細島　毅）